

神は細部に宿りたもう

今回の題にしたこの言葉に初めて触れたのは、向田邦子の『男どき女どき』の中に入っている「ゆでたまご」というエッセイを読んだ時でした。このエッセイは沢山の方が読まれていると思いますが、読まれていない方のために、内容を少し掻い摘まんでお話しします。

向

田邦子が小学4年生の時のことです。同じクラスに背が小さくて片足の悪い女の子がいたそうです。暮らし向きも芳しくなく、性格も捻くれていて、誰も相手にしないような女の子だったので。遠足の朝、その女の子のお母さんが大量のゆで卵を持ってきて級長をしていた向田に、皆で食べて下さいと預けたのだそうです。その母親が、皆に必死でついて行く娘の後姿を、父兄の集団から一人離れて見送っていた光景が画かれています。ここまで読んで、私はぐぐつと喉が鳴る思いがしました。

もう一つ、この女の子の思い出が画かれています。それは、運動会の時。足の悪い女の子は、徒競走でとびきりのドリ。皆がゴールに入っているのに、まだ足を引きずって走っていた時、一人の女の先生がコーズに飛び出て、女の子を抱きかかえるようにしながら一緒にゴールしたのです。その先生は、掃除の仕方などで、よく叱る先生で、学校で一番嫌われている先生だったのだそうです。ここまで読んで、私は目頭が熱くなりました。向田邦子は、少女時代に記憶したこんな小さな風景に愛を感じると述べ、「神は細部に宿りたもう」と締めくくっているのです。このエッセイを読み終えた私は、胸が震えるほど感動しました。吾子を慈しむ親の愛、教え子をしつかりと見詰め、普段は厳しくとも、時として温かな手を差し伸べる教師の愛を教えさせられたエッセイでした。

年

端もいかなない五歳の女の子に「許して」と言わせながら無残にも殺した親。スポーツの指導と称してハラスメントを行い、何の反省もなく護身だけに始終している指導者。子どもを若者を守り育てなければならぬ立場にある彼等が行った、あまりにも無慈悲で自己本位で残酷な行為に、大きな憤りを禁じ得ません。彼等の行為は厳しさではありません。正に嫌がらせ、いじめの何物でもないと思います。

教

師として子ども達と向き合う時、厳しく接する場面も多々あるで徒に接して嫌われることもあるでしょう。嫌われることを恐れてはなりません。その厳しさの根底に子ども達への温かな思いがあれば、何時か必ず、厳しく接した教師の気持ちを分かってくれる時が来るはずですが、それは、すぐの時もあれば卒業してからのこともあるでしょう。もしかしたら教師が此の世を去った後かも知れません。しかし、その子ども達が懸命に生き、挫折を味わいながらも一歩ずつ前に向かって進んで行ったならば、必ずや分かってくれと信じて居ます。しかし、厳しいだけでもいけません。また、優しいだけでもいけません。今、子ども達に必要なのは、厳しさか優しさか。それを見極めなければなりません。いまの世の中、愛のない厳しさ、そして愛のない優しさが横行しているように思えてなりません。

神

神は細部に宿るのです。愛は、ちよつとした小さな行為に深く宿るのです。その為にも、子ども達のことを切に思いながら接することを忘れてはいけないと思うのです。

読まれていない方に、一度「ゆでたまご」を読むことをお勧めします。

(元青森県立北斗高校校長)